



鎌倉の猫事情 第三十八話

COLUMN

こうして、グーニー君と灰色猫との戦いは幕を閉じたのでした。その後、この裏路地あたりで灰色猫を見かけたことも、どこかで見かけたという話も、聞くことはありませんでした。一度は憎いと思った宿敵であれ、正々堂々と戦い、縄張りと家族を守り抜いた今となっては、何でしょうか、気になります。灰色猫はいったいどんな事情で暮らし、この裏地に現われたものなのか、不思議でした。平和な路地であることは、何よりですが、グーニー君もどこか気の抜けたように毎日を暮らしているようです。そんな平和な屋下がり、隣の居酒屋さんに長年働く姉さん…きよちゃんと呼んで皆で親しんでいる人がミルクホールに現れました。きよちゃんは、グーニー君なんかよりずっと昔からお隣にいます。グーニー君初め一家とども並々ならずお世話になっている人です。そのきよちゃんが、その日ミルクホールで、ブレンドコーヒーをすすりながら聞かせてくれた話によると、つい最近まであの灰色猫は小町通りの床屋さんのビルの屋上に住んでいたそうです。それもどこからともなく現れて、ある時気づくと床屋さんが物干しなどに使っている屋上に何気なくおいたマットの上にあの灰色猫が寝ていたそうです。そのマットは初めは捨てるつもりでもなかったそうですが、そうして毎日灰色猫が使っているのを見て、もういいやと思ってあきらめたそうなんです。といっても餌をやるわけでもなく、その古マットの上に、お情けでおいてもらっていたようなものだったそうです。



きよちゃんは、灰色猫のことが気になって、わざわざ追跡し、床屋さんまで行ってその話をつきとめたそうです。そして最近聞いた話によると、近頃はそのマットにも、寝に帰っていないという話で、どうやらあの夜以来、灰色猫がこの町を出たのは確かなことのようにです。こちら、きよちゃんにあの夜のグーニー君たちの勇敢な戦いぶりを話しました。きよちゃんは大きく頷いて、「そうだったの。それで最近姿を消したのね」と言いました。きよちゃんもこの数ヶ月にわたる、グーニーと灰色猫との戦いを固唾を呑んで見守っていたそうです。あまりのグーニー君の劣勢に見るに見かねて、時には物陰から灰色猫にむかって石を投げて加勢したこともあったそうで、さすがに初めて聞くその話に私も驚き、隣人の厚情にありがたく思ったものです。それにしても、町を出た灰色猫はどこへ行ったのでしょうか。温かく平和に暮らす家があり、ひもじくて不安な夜を過ごす事もなく、ともに力をあわせて戦うことの出来る愛する家族もあり、こんなに気にかけてくれる隣人もいるグーニー君にくらべて、灰色猫のなんと寂しく心細く孤独なことでしょう。

情けをかけてくれた床屋さんのビルも出て、たった一匹どこへ向かったのでしょうか。今年も、また秋が深まりつつあります。肌寒くなると、決まって猫たちの動きがにぶくなってきます。

今夜もグーニー君は柔らかな暖かいベッドから離れようとしません。一歩外へ出れば、人間界とは関わりの無い非情な動物達の世界が闇を広げて待っているのです。

鼻ちようちんふくらませて安眠をむさぼるのも、第二第三の灰色猫が現れるまでの今しばらくあいだです。

今夜のところはグーニー君、このまま眠らせてあげることにしましょうね。

今年も、また秋が深まりつつあります。肌寒くなると、決まって猫たちの動きがにぶくなってきます。

今夜もグーニー君は柔らかな暖かいベッドから離れようとしません。一歩外へ出れば、人間界とは関わりの無い非情な動物達の世界が闇を広げて待っているのです。

鼻ちようちんふくらませて安眠をむさぼるのも、第二第三の灰色猫が現れるまでの今しばらくあいだです。

今夜のところはグーニー君、このまま眠らせてあげることにしましょうね。



Away 道

夕暮れの風が吹き始めて、電柱の影が隣の塀にかかる頃、俺はいつものように愛車のナナハンに跨って…とやりたいところだけど、実は90ccのバイクのエンジンをかける。やっと手に入れた年代物だ。キルルルル…音も軽くて情けないけどショウガナイ。買い物客がウロウロ歩く通りを蹴散らして、俺はぶっ飛ばしに出かけるんだ。厚手の革ジャンの内ポケットに…本当はさえないジーザンだ。ガード下の太玉商会で手に入れた中古物だけど、まあまあだな。そのポケットにしのばせたウォークマンのスイッチを入れると、グランド・ファンク・レイルロードのハートブレイカーが渋い音で鳴り響く。スクランブル信号の角を曲がったら、頭の中はロックでがらがんしてもう他にはなんにも聞こえやしない。危ないぞって？構うもんか、そうして枯れた桜並木の坂を登ったり降りたりして、今度は裏道に入る。ここは俺さまの抜群のテクニクでコーナリングだ。ペブシの自販機…なんでペブシなんだよ？の前を通り越して突き当たりの山にぶつかんないように曲がると、トンネルはもうすぐだ。あれは不思議なトンネルだな。なんだってオレンジ色に光っている。トンネルに入ると何かがオキルって気がする。あそこじゃなくても、トンネルはどこでも変な感じだ。実際あの日だって、バイクの名手だった吉川君が、トンネルを出たところで死んでいた。なんだって相手も何もないところで独り死んじやったんだらうな。いったいトンネルの中で何があったんだ…この最後のコーナリングがポイントさ。この路地から一度もブレーキを掛けずに曲がりきれたときが、最高にハイなんだ。トンネルが見えて来たぞ。オレンジ色に光って、中に入ると光の渦に包まれる感じが。時間がだんだん長くなる。光が真っ白になり始めた。ああ、きれいだ。なんだか俺も帰りたくなっちゃったよ。



to be continued